

Call my name

河村 ミキ

「し、失礼します……」

絞り出すような声で、わたしは扉に向かって叫んだ。

扉の向こう側から『どうぞ』という声は聞こえたが……生憎、こちらの両手はドアノブを触れる状況にはない。腹筋と二の腕の筋肉をフル稼働させて紙の塊を山と抱えている　と言えれば分かるだろうか。

たかが紙、されど紙。塵も積もれば何とやら　…とは、わたしたちの世界ではよく言うが、こちらの世界にも同義の言葉はあるのだろうか。ダイナスティアにことわざ辞典などがあるのなら、ぜひとも拝見したい。

なかなか入ってこない声の主を不審に思ったのだろう、逡巡しているうちに向こう側からドアノブが鳴った。蝶番がきしむ音がすると、研究室独特の機械油のにおいが廊下に流れてくる。それと……ほんの少し、薬のにおいも。

「ああ、あなたでしたか」

本の山の頂から、辛うじて亜麻色の猫毛が覗いた。

「う、ラリマーさん、こんにちは」

身体ごと横を向き、精一杯愛想良くするように努めた笑顔を返す。顔は笑っているが、二の腕の方はもはや限界。筋力勝負はいつの間にか、持久力勝負の様相を見せ始めた。

「えと……フローライトさんをお願いされた本、持って来ました」

「ご苦労様です。すぐに呼んで参りますね」

柔らかい口調でそう言うと、ラリマーさんは研究室の奥へと歩いていった。それを見送り、いつも通りに研究室の隅にある机へと歩を進める。いつ来ても実験器具があちこちに散らばっているこの研究室、踏み進める足元にも細心の注意を払わなければならない。片付けても片付けてもキリがない……』と、この助手さんもいつもぼやいている。

「聖乙女様！」

ラリマーさんとは違う声が、わたしをそう呼んだ。すぐにその声の主はわたしの手から軽々と本の山を持ち上げる。やっぱり男性の力はすごい。

「大丈夫かい!!?　なんか申し訳ないな、女性にこんな重い物を持たせて」

一気に視界が開けた。突然目の前に現れた青年の姿を捉えた途端、わたしの心臓は大きく跳ね上がった。王立聖アズール研究院、コランダム研究室助手・フローライトさん。今日は彼に会いに来た　と言っても過言ではない。

「いいんです。わたしも好きでやってる事なんですから」

びりびりした両手を後ろ手に隠し、わたしは言った。「本当にありがとう」と言う彼の表情に、わたしの頬はすっかき緩んでしまう

それでは、私は失礼します。そろそろアレキサンドラ教授の所に行かなくては」

そう言うと、ラリマーさんはわたしたちに有無を言わせないままに研究室を出て行ってしまった。退出際に『ゆっくりどうぞ』と、わたしに向かって言って。

「……忙しいんだな、ラリマーの奴」

フローライトさんはそう言うが……わたしには他意があるように思えて仕方ない。乙女の勝手な妄想と笑われても、何も言えないけど。

「まいったな……これからお茶にしようと思うんだけど、一緒にどうだい？」

「いいんですか？ あ、でも」

この研究室の主を差し置いて、というのはいかがなものか。しかし当の本人、コランダム教授はこちらなんか見向きもせず、くすんだ銀色をした巨大な機械をぶつぶつ言いながらいじっている。……きっと、来客にも気づいていない。

先生なら、さっきあっちの部屋にドーナツを置いてきたから、それに今日はチーズケーキを焼いたんだ。一人で食べるのは味気ないだろ？」

そういうことならば、喜んで。

ポットから注がれる紅色はティー・キャラメル。ふわりと立ち上る甘い香りと焼けたクリームチーズの香ばしい匂い。どちらも断るのは罪というものだ。

元々わたしはここ、セイントジェムスより遙か南にあるグレイルに降臨した聖乙女。同じ聖乙女である親友にこの国の話を聞いて出向いてみたら……ここを離れられなくなったのだ。グレイルでちょっと嫌な事があって、それで少し気が臥せていたから尚更。決して聖乙女同士のいざこざなどではなく、元よりダイナスティアの住人である少女との諍い。なぜわたしがあんなにも彼女に嫌われているのかが分からなくて……延々と自問自答を繰り返した結果、しばらくグレイルを離れることにしたのだ。親友たちもそれを勧めてくれた。

ダイナスティアは女性が『女神の使い』として尊ばれる世界。そんな世界で、聖乙女である自分はどこへ行っても最大級のもてなしを受ける存在。そんな『ちやほやされるのが当然』の空気に慣れきって、驕りが出たのではないか……。そもそも新参者の自分が我が物顔でグレイルの王都、ブルータル・モーレイを歩いている事自体、彼女には面白くなかったのかも知れない。だからあんな事をされた。彼女を怒らせた。

彼女の真意は、どこにあるのだろう……グレイルとは違う、ジェムスのひんやりとした空気に問いかけても、答えは返らない。だけど一瞬にして、エレスチアルの空気に居心地の良さを感じてしまった。ここは潮の匂いがなく、何となく故郷に似ている。この王都のような賑やかさはなかったが、山に囲まれた景色は、やはり育った場所とかぶって見えた。

文字通り『右も左も分からない』ままに訪れたばかりのエレスチアルを彷徨っていたら……フローライトさんに出会ったのだ。道に迷ったと思われ（実際、そうだったが）、声をかけられたのが始まり。寒冷な気候に相応しくない服装をしていた事も彼の目を引いたらしい。

「うちの研究室にも女性がいたら、もっと華やぐんだろうけど ……」

聖乙女寮まで送ってもらう道中、冗談っぽくフローライトさんは笑って言った。きっと深い意味はない。

でも……その瞬間、わたしは決めた。ここに滞在する事を。そしてその場で頼み込んだ。

『フローライトさんの助手にしてください』と、助手の助手 というのも 変な話だが。

あちらの世界ではお世辞にも理数系の科目は芳しとは言えなかったので(今となってはその勉強すら投げ出して、こうしてダイナスティアの地を踏んでいる)、ここで行なわれている研究に関わろうとは、はなから考えていない。別の形で彼の助けができれば。たとえ体のいい使いっ走り 聖乙女寮隣の図書館と、聖アズール研究院の往復であっても、彼に関われる事ならば構わない。

それにわたしには、聖乙女のみにも与えられた魔法の力 メタモリングがある。これが意外と役に立った。昼夜を問わず勉強や研究に励むコランダム研究室は常に明かりが灯っている。電気のない世界で光源となる物は ……。尚且つ彼が面倒を見ていると言っても過言ではない自称天才・コランダム教授は大のドーナツ好き。これだけ並べれば、研究室の食事や金銭を管理している彼にとって何が重要なのかは推して分かるというもの。……案の定、その贈り物は大いに喜ばれた。

そしてもちろん、今日も持参している。袈裟懸けにした鞆にはそれがひしめいている。

「もしかして、その鞆の中身……」

「あ、はい。また持って来ました」

ほんの「黄味」がかった、ちょっと変なおいがしだした豆を分離させたら偶然出来た油は、食用に出来るか疑問なのでランプ用。無色透明の揚げ物用は肉の脂身から。濃い茶色はごまを搾って作った油で、炒め物にいいのだ。特に野菜炒めを作ると格別。

「やっぱり聖乙女様ってすごいな。ランプ用の油まで魔法で作っちゃうなんて」

「」

「本当に助かるよ。君のおかげで俺が勉強する時間もできるし、研究費も浮くし。良かったらお礼したいんだけど、そうだな……森にピクニックなんか」

「あの、フローライトさん」

「気分よくまくし立てた言葉を遮るのは気が引けたが……仕方ない。」

「その……わたしにも、名前があるんです。聖乙女様』以外の名前が」

この切り口が示すところ、つまりは……フローライトさんも察してくれたらしい。

大概の聖乙女はそうだが、降臨するまでは特別扱い 特に、祭り上げられる事にはまるで縁がない。もちろんわたしも例外じゃなく、聖乙女とて、元を正せば人間。もちろんわたしにも名前はある。ただ…… 聖乙女』であるために、その名を気安く呼ぶことがはばかられるのだ。ましてやその名を尋ねられる事など全くない。聖乙女様』で、全て片付いてしまうのだから。降臨して唯一わたしを名前と呼んでくれたのは、インカローズ卿くらいか。

ダイナスティア全土の民の心情は、大いに理解しているつもりなのだ。しかし聖乙女としてかなりの月日を過ごしたわたしでも、そこにはいささかの抵抗……とらか不満がある。

だからこそ踏み込みたかった。少しだけ、フローライトさんの近くに。

わたしは……」

言いかけた途端、火薬のにおいが鼻を突いた。フローライトさんも気づく。

フローライトさんが立ち上がったその時

ものすごい爆音が耳をつんざいた。さあっと吹き抜ける熱い風。

危ないっ！」

シャツのオレンジ色が目の前に飛び込んできた瞬間、一瞬にして世界は暗転した。

気を失うなんて、生まれて初めての経験だ。

自分が二歩足で立っていないのは、辛うじて分かった。さっきまでフォークを握っていた指が鉛のように重い。耳元から咳のような音がするが……この状況では何がなにやら。仰向けに倒れた身体に、何かが胸から腹部にかけてを押しつぶすように覆い被さって、息すらままならない。

「ん…丈夫……？」

フローライトさんの声。すぐに胸元が軽くなる。

重圧から解放されて薄目を開けると、視界は陰って見えた。覆い被さるように見下ろすのは…フローライトさんのヘイゼル色の瞳。その中に、自分が映って見える。

「……!？」

(わ……！)

声にならない叫び、というのは……口を開けなくても出るものらしい。いや、声にならない』んだから、口を動かす必要もないのだろうけど。

吹き飛ばされた衝撃で腰が抜けたのか、それとも、現在の構図を客観的に見下ろした図を想像して、内側から脳神経がやられたのか。心臓はバクバクと暴れまわっているのに、身体はぴくりとも動かす事が出来ない。澄んだヘイゼル色もこちらをじっと見下ろして…そのまま吸い込まれてしまいそうな錯覚。時間の概念も吹き飛んでしまう。鈍い痛みを響かせる頭では、思考もままならない。

「一体何事かね……って」

はっとして二人同時に入り口の方を向くと…そこには三人分の影。ソーダライト教授にアレキサンドラ女史、そして…ラリマーさん。三人とも目を点にしてわたしたちを見下ろしている。

わたしもフローライトさんもバネ人形のような勢いで起き上がり、互いに触れられない距離まで離れた。後ずさった瞬間に、こめかみに針のような痛みが刺す。さっきまで二人ともまるで動けなかったのに…人間の身体というのは分からない。

「ち、違うんです。爆発したところを、彼女を庇おうとして ...」

フローライトさんが目配せすると、わたしも黙って何度も頷く。何がどう違うのかなんて、そんな野暮な事は聞かないでほしい。

意外とすんなり、お三方は納得してくれた。すぐにソーダライト教授とラリマーさんが硝煙立ちのぼる研究室の奥へと進み、アレキサンドラ女史はわたしの側に膝をつき、怪我はないかと尋ねながら身体じゅうを見てくれている（後で聞いたところ、『ぼんやりした目をしていたので、頭を打ったのかと心配になった』そうだ）。すぐにコランダム教授とソーダライト教授、二人が言い合う声が聞こえた。原因は何であれ……いちばん危険な場所にいたはずのコランダム教授が無事そうなのはほっとした。

心配そうに見下ろすアレキサンドラ女史の問いに曖昧に頷き ...一呼吸置いて見渡したコランダム研究室は、散々なものだった。部屋じゅうに火薬のにおいが立ち込め、床には金属片とガラスの破片が散らばり……こと廊下をつなぐ扉は、黒く煤けたまま向かいの壁まで吹き飛んでしまっている。もちろんさっきまで食していたチーズケーキなんか跡形もない。

……よく、わたしもフローライトさんも生きているものだ。

（あ……）

オレンジ色のシャツの下 フローライトさんの二の腕のあたりから、血の色が滲んでいるのが見えた。赤い筋は腕を伝い、袖口に溜まり、指の先端まで続いている。

ポケットを探り、ハンカチを取り出す。聖乙女のたしなみというやつで ...いつも持ち歩いているのだ。しかしフローライトさんに差し出そうと腰を浮かせた所を、アレキサンドラ女史に目撃く見つけられた。

「ここは私たちに任せて、あなたは帰りなさい。そして他の聖乙女に、『今日は研究院には立ち入り禁止』と伝えてくれる？」

「え……あ、はい」

握り締めたハンカチをそっとポケットに戻す。そして唇を噛んだ。

心なしか重い身体を引きずるように、のろのろと立ち上がる。きっと女史は自分をこの場から離れさせるために口実を作ってくれたのだろう ...伝令役を命じられたら、本当に帰るしかないじゃないか。フローライトさんの手当てもしないまま。

気をつけて、と、フローライトさんの唇が動いた。小さく頷き、きびすを返す。

「……失礼します」

礼をして、扉をなくした研究室の入り口を出た。周囲には早くも研究生たちが集まり、人だかりを作っている。それを制するアイオライトさんやペリドットさんの脇を抜け、一気に廊下を駆けた。

ほんの少し視界がかすんで見えたのは……きっと気のせいじゃない。

聖乙女寮前の掲示板に事の次第を書き込み、ようやく少し冷静になれた。

(フローライトさん.....)

火薬のにおいと血の赤色を思い出し、顔を伏せる。

きっとあの爆発の瞬間に、爆風に乗った破片が彼の腕を切り裂いたのだろう。傍目には何ともなかったようだが...傷というのは自覚すると、途端に痛みが襲ってくるものなのだ。今頃誰かが、彼の手当てをしてくれているのだろうか。彼が苦しむ姿を見なくて済んだという点では、アレキサンドラ女史の判断は適切だったかもしれない。

自分を気遣ってくれる、労わってくれる...それは、痛いくらいに伝わっている。だけどその心遣いが、当の聖乙女を少なからず苦しめていることには気づいていない。

聖乙女には...自分のせいで傷ついた人に、ハンカチを手渡す事も許されないのか。自分はそれほど、大事にされなければならない器なのか。元よりダイナスティアの地に息づく民と、外界から降臨した聖乙女...こんな形で、互いの距離を思い知るとは思わなかった。

確かに物理的な距離は、一瞬だがぐっと縮まった。あんな近くに...ヘイゼル色の瞳に、自分の顔が映し見えるくらいに。きっと唇同士も、ものすごく近い距離にあったんだと思う。もう少しかがめば、触れてしまいそうくらい。ほんのりキャラメルのような甘い香りがした息も...かあっと、頬のあたりが熱くなる。鎮まった心臓がまた大きく跳ねだす。

(何思い出してるんだろうわたし.....)

やっぱり顔を打つらしい。浮かび上がった雑念を振り払うようにかぶり振った。

聖乙女の魔法ですら、互いの立場から来る心の距離を縮める事は出来ない。名前で呼んでもらうことは、その第一歩に過ぎないのだ。しかし、その一歩を踏み出させる一言すら口にできない自分が...ここにいる。

痛い.....」

思わず咳く。

言い表せないくらい、本当に痛いのだ。胸の奥が.....締め付けられるように。

「え~!? それで結局何も言えないで帰ってきちゃったの!?!」

手のひらサイズの相棒が、素っ頓狂な声を出す。せめて呆れて叫ぶかおやつを食べるか、どちらか片方に専念できないものか。

聖乙女寮・わたしの部屋。さっきまでお昼寝をしていた妖精は、帰ってきたわたしを見た途端、その姿に目をむいた。意気揚々と出て行ったご主人が真っ赤な目をして身体じゅうから焦げ臭いにおいをさせて帰ってきたのだから、驚くのはまあ当然。赤紫色の髪は先端が少し焼け落ち、お気に入りのおセーラーワンピースや真っ赤なボンカチューシャも煤まみれ。セー

ラーワンピは元々黒いから隠しようがあるが、リボンカチューシャとアンダーのブラウスは……作直しかもしれない。赤のリボンカチューシャなんて、ジェムスで同じ色を作ろうとするとものすごく時間がかかるのに。

現在は着替えて、少し横になってだいぶ気分はいいが、台所に漬け置きされている洋服のことを考えると気が滅入る。石鹸を作らなきゃ、なら花の蜜がいるからお花屋に……とくつろぐ傍らで買い物メモは着実に行を重ねている。石鹸の元になる油の蓄えが残っているのは救いだ。本当なら、その油もコランダム研究室への差し入れのはずだったのだが……。

「昨日あんなに練習したのに～!! どうして肝心なことが言えないの!?!」

「そんなこと言ったって……」

コランダム教授作の機械の暴走に邪魔されました、と報告はとっくに終わっている。こちらがよほど文句を言いたかった。しかし言うだけ虚しくなりそうなので、口を突いて出そうな愚痴はティー・アルマリックと一緒に飲み込んだ。

「こうなったらワタシが言ってくる!!」

「いいから! おとなしくハニーボール食べちゃいなさい!!」

今にも窓から飛び出さんとする妖精をとっ捕まえ、テーブルの上に引き戻す。むくれる妖精の口元にはハニーボールの食べかすがべったり。研究室は立ち入り禁止だし、そんな格好で出られては、恥をかくのはわたしなのだ。それに …

「いつか絶対、自分の口から言う」

そう言うと、わたしもハニーボールを口の中に放り込んだ。人間にとっては一口サイズだが、妖精にとっては一個で十分腹が満たされる大きさ。全部食べさせようとすると何日かかるかわからないのだから、つまみ食いもありだ。

(もしわたしがお願いしたら … フローライトさん、『女神の試練』を受けてくれるかな)

つい考えてしまう そんな心配をするのは、もっと先のことなのに。

でもいつか、それを告げる日は来るだろう。この世界の住人として生きていく事を選んだ時点で、覚悟はできている。そして久方ぶりの『恋』を通して その想いは強まった。

だから……お願いします、フローライトさん。

わたしのことは …

完

あとがきのような物

えっと……聖乙女・河村 ミキです。ファンアート大賞向けに書き下ろしてみました。一応隠れて物書き志望なのですが、こんな形で公に出していいものかと迷う次第であります。『自分の実力を測る』ということがなかったのです。

読んでの通り、ジェムスの話です。個人的趣味バレバレ(汗)。フロ様の事を好きな乙女様はいっぱいいらっしゃるので、敢えて自分の名前は使いませんでした。自分の名前を使っちゃったりしたら、『独り善がり』ってやっかみを買いきそうな……。ただでさえその生き様は賞賛に値するのに。　　て言うか、絶対にフロ様、普通の人間だったら何回か三途の川渡ってると思うんですが・……^^；

流れから言うと、グレイルに降臨　ピルにいじめられる　しばらくジェムスにほとぼり冷まして　フロ様に会う　居付く(笑)　……とまあ、こんな感じ。自分のダイナ遍歴まんまなのは(ピルにはいじめられてないけど)　ご内密に。

あ、30期後半でピルに水かけられた上に、激マズクッキー食わされたか(^^#)

締め切りが延びたためにこうして日の下にさらす事が出来ましたが……正直、ファンアート大賞出品は諦めてました。リアルで時間が取れなかったもので。リアルの友達ともなかなか遊べないのに、毎日必ずPCの前にいるってのもどうかと思うんですけどね。でも、こういう時にダイナの友達は貴重ですね。多少遊ぶのに適さない時間でも(…)ロビーには誰がいる、というのが。特に『グレイルロビーたむろ組』とは仲良くさせていただいてます(7さんとか鈴とか……)。かくいう私も、たむろ組(笑)。最近じゃたむろ組=ゾンビ隊の様相も見せ始めていますが……まあ気にしない。

これからも、いち聖乙女&ゾンビ隊の一員としてダイナライフを満喫させていただきます。

ここで一句。

「イベントは 計画すると より楽しい」

……お後がよろしいようで(よろしくないから)

2005.11.13 河村 ミキ